

# 芥川龍之介の長沙遊歴——1921年の排日運動を中心に

(前・東京女学館大学) 藤谷 浩悦

## [要旨]

芥川龍之介は1921年5月29日から6月1日までの4日間、湖南省長沙を訪問し、この体験を下に1926年1月、小説「湖南の扇」を発表した。芥川龍之介は長沙滞在中、多くの事物を見学すると共に、激しい排日運動に遭遇し、小説「湖南の扇」の中で、この排日運動の底流にある復仇の念を伝えた。この復仇の念は、民間伝承に基づく民衆の精神を表している。芥川龍之介は時代の行く末を見据え、湖南省の農民運動の興隆を予見していた。ただし、芥川龍之介は、小説「湖南の扇」の登場人物に、この民衆の精神を迷信として否定させた。ここには、近代化と伝統文化の葛藤が顕在している。

## はじめに

芥川龍之介は1921年3月末、大阪毎日新聞海外視察員として中国に派遣された。しかし、芥川は上海に到着早々、乾性肋膜炎を患い、里見病院に約3週間入院後、上海から江南、長江、廬山に赴き、漢口に到着し、洞庭湖をへて湖南省の省都・長沙に至り、再び漢口に戻ると京漢鉄道で北上し、洛陽、北京、大同、天津、奉天、朝鮮などをへて7月末に帰国した。

芥川龍之介は「上海游記」を8月17日より9月12日までの、また「江南游記」を翌1922年1月1日より2月13日までの『大阪毎日新聞』に連載し、これらに「長江游記」「北京日記抄」「雜信一束」を加えて、1925年11月に『支那游記』として改造社から出版した。芥川龍之介は同書の「自序」で、「『支那游記』一巻は畢竟天の僕に恵んだ〈或は僕に災いした〉Journalistic的才能の産物である」と記している。芥川龍之介の「長江游記」は蕪湖に始まり、長江を溯り、九江をへて廬山で終わり、次の「北京日記抄」は北京の雍和宮から始まり、紫禁城の観光で終わる。このため、芥川龍之介は「雜

信一束」を加え、漢口から北京の間（長沙、京漢鉄道、鄭州、洛陽、龍門など）と北京から日本まで（満洲、朝鮮など）の欠落部分を補充し、『支那游記』の体裁を整えた。しかし、「雜信一束」は、絵葉書などに記載された個々の逸話を羅列しているにすぎないため、芥川の足跡を辿ろうとした場合、内容的には不十分である。

芥川龍之介は長江遊歴の間、疲労が蓄積し、気力も衰えただけでなく、日本に帰国後も多忙であったことが、『支那游記』の執筆を遅れがちにさせ、漢口から北京までの叙述を不十分な内容にさせた一因であったように思われる。それでも、芥川龍之介は湖南省に強い思い入れを抱き、ここでの出来事を何らかの形で書き留めたいと考えたからこそ、中国旅行から約4年半後に「湖南の扇」を脱稿し、『中央公論』1926年1月号に掲載したのであろう。この作品は、小説でありながら旅行記の体裁を取っているだけでなく、芥川が自殺する約2年前に発表され、謎の多い内容となっている。そして、多くの研究者がこの作品に関心を抱き、優れた研究成果を発表してきた<sup>(1)</sup>。また、芥川龍之介の『支那游記』についても、様々な観点

から分析がなされてきた<sup>(2)</sup>。ただし、これらの研究は、殆どが日本文学や日本思想史の分野でなされたものである。筆者は従来、中国近代史研究の一環として、湖南省の政治、社会、文化に関心を抱き、研究を行ってきた<sup>(3)</sup>。芥川龍之介の1921年の長沙紀行は、この中国近代史研究の立場からしても、五四運動後の湖南省の体験記として注目すべき内容を含んでいる。

本論文では、芥川龍之介の長沙での足取りを辿りながら、芥川龍之介が長沙でどのような体験をし、これらの体験がいかなる政治的、社会的背景を持ち、小説「湖南の扇」の中にどのように反映されたのかという点について、『支那游記』「雜信一束」や書簡、メモを手掛かりに考察する<sup>(4)</sup>。芥川龍之介は『支那游記』の中で、長沙滞在中の出来事を殆ど記していない。しかし、芥川がどのような場所を回り、何を見たのかは、これらのメモなどを手掛かりにすることで、ある程度まで復元することができる。芥川龍之介は目撃した出来事、会談した人々の全てを、メモに書き留めているわけではない。芥川が書き留めなかったことも、書き残したことと同様に重要となる。本論文では、中国近代史研究の特徴を活かし、1921年前後の中国の新聞記事、日本人や中国人の日記を渉猟しながら、芥川龍之介の滞在中に長沙で起きていた出来事を調べ上げると共に、芥川が長沙で起きていた出来事のうち、何に反応し、何に反応しなかったのか、反応しなかったとすれば何故かを考えてみたい。

以下、第1章では上海の知識人との会談の内容を下に、芥川が上海で抱いた印象を、第2章では長沙での足取りを追いながら、芥川の排日運動に対する反応を、第3章では芥川が小説「湖南の扇」の執筆に至る動機や参考にした文献、及び訴えようとしたことに考察を加える。

## I. 上海から長沙へ

### 1. 芥川の上海訪問

1920年7月、北京政府の支配権をめぐり、安徽派と直隸派の間で内戦（安直戦争）が勃発した。前者の総司令は段祺瑞、後者の指導者は曹錕だが、前戦総司令の呉佩孚が実権を握った。この内戦は、奉天派、すなわち張作霖を領袖とする軍閥が直隸派を支持したこと、直隸派の勝利に終わった。しかし、新しい北京政府は、直隸派と奉天派が勢力争いを起し、不安定となった。これに対して、南方では、孫文が「護法（臨時約法の護持）」を掲げて新政府の樹立を図り、広州を中心に西南軍閥と離合集散を繰り返していた。また、長江流域の各省は、湖南省を中心に、各省の自立と連合、すなわち連省自治運動を起こしていた。

1921年3月1日、宮崎滔天と萱野長知がこの孫文を訪問すべく、クライスト号に乗り神戸を出帆している。二人は3月6日に上海に到着し、居正、戴天仇、章炳麟と会合すると、3月12日に広州に到着、広東軍政府に赴き孫文と会見し、3月13日に孫文らの招宴を受けて、3月14日に孫文と告別して後、広州を出立して香港に至り、3月18日に上海に戻った。宮崎滔天は3月18日と25日に宗方小太郎と会談すると、3月26日の熊野丸で上海を出帆、3月29日に神戸に到着した<sup>(5)</sup>。この間、上海の鄭孝胥は、3月19日に宗方小太郎より、4月には張作霖による溥儀の復辟が必ず起こると告げられていた。しかし、3月28日、この謡言は否定されている<sup>(6)</sup>。芥川龍之介の上海訪問は、張作霖を中心とする溥儀の復辟の謡言が起き、急速に萎んだ時期にあたる。

芥川龍之介は1921年3月30日に上海に到着すると、大阪毎日新聞上海支社の村田孜郎やロイター通信社上海支局のトーマス・ジョーンズの出迎えを受け、万歳館に荷を下した（「上海游記」）。宮崎滔天は3月26日に上海を出たため、芥川の上海

訪問とは入れ違いになった。村田孜郎は同日、芥川龍之介を連れて宗方小太郎を訪問している。宗方小太郎は熊本の出身で、上海を拠点に、中国の政治家や言論人と交流を深め、中国各地の情報を収集し、日本政府、陸海軍に情報を送っていた。芥川龍之介は3月31日に里見医院に入院すると、宗方小太郎は4月2日に芥川を里見医院ではなく、宿舎の万歳館に訪ねている。芥川龍之介は4月23日に退院するが、入院中も外出を許されていて、4月21日の波多博の主宰する晩餐会に出席していた。この晩餐会の出席者は、芥川龍之介以外では、宗方小太郎、島田数雄、井手三郎、西本省三、村田孜郎、林出賢次郎、太田外世雄である。宗方小太郎は4月24日、鹿島丸で帰国の途に就いた<sup>(7)</sup>。

ここで、4月21日の晩餐会の参加者について、その経歴を簡単に述べておこう。

波多博は1885年、大分県に生まれ、東亜同文書院を第6期生として卒業後、順天時報社に勤務したが、宗方小太郎の要請で上海に戻り、1914年に東方通信社の創設に参画している。

井手三郎は1862年に熊本に生まれ、1887年に上海に渡り、荒尾精を助けて上海や漢口の樂善堂、日清貿易研究所の運営に尽力し、近衛篤麿の信頼を得て同文会、東亜同文会、東亜同文書院の設立に関わり、中国で各種新聞を発行して、対日世論の形成に従事した。

島田数雄は1866年に熊本に生まれ、井手三郎、宗方小太郎とは同年代である。二松学舎の三島毅（中洲）に漢学を学び、井手三郎に請われて上海に渡り、『上海日報』の主筆となった。

西本省三は1878年に熊本に生まれ、1899年に南京同文書院に学ぶと、東亜同文書院の中国語講師となり、1913年に宗方小太郎、島田数雄、佐原篤介、鄭孝胥と春申社を設立し、週刊誌『上海』で論陣を張ると共に、沈曾植（号は子培）に師事して儒学を究め、『大儒沈子培』『支那思想と現代』

などの大著を著した。

林出賢次郎は1882年に和歌山に生まれ、1905年に東亜同文書院を第2期生として卒業後、外務省嘱託として新疆のイリ地方を視察、1908年に新疆省法政学校や新疆省陸軍学堂の教習となり、奉天、南京、漢口、上海の各領事館に勤務した。

太田外世雄は1886年に石川に生まれ、1908年に東亜同文書院を第5期生として卒業後、四川省の重慶に赴き、同地の研究に従事し、農商務省の実業実習生となった後、漢口、上海、天津などの領事館に勤務した<sup>(8)</sup>。

4月21日の晩餐会は、春申社の成員が中心となった。春申社は1913年2月11日、西本省三、宗方小太郎、島田数雄、波多博、鄭孝胥によって創設され、佐原篤介を代表に、雑誌『上海』などを発刊した。西本省三は同雑誌を実質的に運営し、共和政体を攻撃し、溥儀の復辟を訴えた。この4月21日の晩餐会では、芥川龍之介が上海で会うべき人物について話し合われたと思われるが、同時に張作霖を中心とする溥儀の復辟運動についても話題になったであろう。しかし、芥川龍之介は上海で宗方小太郎と会ったことや、4月21日の晩餐会の模様を記録に留めていない。

## 2. 上海から長江へ

芥川龍之介は4月24日すなわち退院の翌日以降、4月30日までに、鄭孝胥、李人傑、章炳麟、李經邁、余洵と会談を重ねた（「書簡」953）。ただし、芥川はこの5人のうち、『支那游記』で言及したのは、鄭孝胥、章炳麟、李人傑の3人のみである。これらの会談では、鄭孝胥の場合は波多博と村田孜郎、鄭垂（鄭孝胥の子息）が、章炳麟の場合は西本省三が通訳をし、李人傑の場合のみ李人傑が日本語に堪能であったことから、通訳を介さずに会談が行われた。

以下、少しく、芥川龍之介が会談した人物の経歴について、述べておこう。

鄭孝胥（字は蘇龕、号は海藏）は1860年生まれ、福建省福清の人で、神戸兼大阪駐在領事などを務め、1911年に湖南布政使となるが、程なく北京に戻り、10月10日の武昌蜂起を受けて上海に避難した。

章炳麟（字は枚叔、号は太炎）は1869年生まれ、浙江省余杭の人で、考証学を修めて「国学大師」と称され、排満種族革命を説き、孫文、黃興と共に「革命の三尊」と呼ばれ、仏教にも造詣が深かった。

李經邁（字は季臬、季高）は1876年生まれ、安徽省合肥の人で李鴻章の次子、オーストリア駐在公使の他、各省の按察使を務め、武昌蜂起後に上海に隠棲し、1917年の張勲による溥儀の復辟にも関わった。

余洵（字は穀民、号は大雄）は出生年が未詳、安徽省の人で、日本に留学し、1914年に帰国、『大共和報』や『神州』の編集、『神州日報』の社主となり、1918年2月に『神州日報』を宗方小太郎に売却し、1919年から『晶報』を発行した。

李人傑（原名は書詩、字は人傑、号は漢俊）は1890年生まれ、湖北省潛江県の人で、1904年に兄の李書城を追って日本に渡り、曉星中学校、第八高等学校に学び、1915年に東京帝国大学土木工学科に入学、1918年の同学卒業後に帰国し、1920年に陳獨秀の設立した共産主義支部組織に参加した。

4月8日から3日間、東亜新聞記者大会が、日本電報通信社専務取締役・光永星郎の発案により、東京の帝国ホテル、日本工業俱楽部、星製薬会社楼上を会場に行われた。中国からは約40名の新聞記者が同大会に参加した<sup>(9)</sup>。余洵も4月1日に上海を発ち、同大会に参加すると、4月20日に帰還し、宗方小太郎らの慰労を受けていた。宗方小太郎は、上海の鄭孝胥、章炳麟、李經邁、余洵と往来があった。芥川龍之介とこれらの人々の会談は、4月21日の晩餐会を以て、宗方小太郎、波

多博、西本省三など、春申社の成員の周旋で実現したように思われる。ただし、宗方小太郎らは、李人傑と交流がなかった。芥川龍之介と李人傑の会談は、芥川の意向を踏まえ、宗方小太郎らとは別のルートで実現したことになる。李人傑は海鏡、広晶の筆名を持ち、日本の論説などを中国語に翻訳していた。この約1ヶ月半前の3月9日、日本の作家、友人約40名が集い、芥川龍之介の中国旅行の送別会を上野精養軒で開いていた。芥川はこれらの会合で、李人傑の上海在住を知らされたのではないだろうか。

芥川龍之介は4月24日、すなわち退院の翌日以降、鄭孝胥、章炳麟、李人傑と相次いで会談した。鄭孝胥は芥川龍之介に対して、「支那は共和に執する限り、永久に混乱は免れ得ない。が、王政を行ふとしても、当面の難局を切り抜けるには、英雄の出現を待つばかりである」と述べた。章炳麟も鄭孝胥と同様に、現代中国の政治や社会の問題を語り、現状に不満を述べ、かつ将来を悲観的に論じた。これに対して、芥川龍之介と李人傑の会談は、李人傑の28歳という若さもあり、「現代の支那を如何にすべきか」を中心に熱の帯びた内容となった。

李人傑は芥川龍之介との会談で、政治革命の時期尚早と社会革命の必要性を説き、「社会革命をもたらさんとせば、プロパガンダに依らざるべからず。この故に吾人は著述するなり」と述べ、更に芥川の「プロパガンダの手段以外に、芸術を顧慮する余裕ありや」との問い合わせにも、「無きに近し」と答えた（「上海游記」）。芥川も社会革命の必要性については認めていたが、何よりも精神の自由を重視していたため、李人傑のように芸術を社会革命に奉仕させる点には、同意できなかつたであろう。もし李人傑の主張するように、芸術がプロパガンダ以外に価値を持たないとすれば、芥川の小説は否定されざるをえない。芥川龍之介は上海に到着して、いきなり政治と文学の問題に

直面させられたのである。

1921年5月2日、芥川龍之介は村田孜郎と共に上海を出立し、2泊3日の杭州旅行をして5月4日に上海に戻ると、5月8日から蘇州、鎮江、揚州、南京の旅に出て、5月15日に上海に戻った。芥川は里見医院で再び診断を受けて問題がないとわかると、5月16日に再び鄭孝胥を訪問し、5月17日に上海を出て長江を溯り、周遊の旅に出た。芥川龍之介は5月19日に蕪湖に到着、5月22日に蕪湖を出て九江に到着し、5月23日から廬山を周遊して漢口に至り、5月29日に漢口を出て長沙に至り、3泊4日の旅をして、6月1日に漢口に戻り、6月6日に漢口を出て、京漢鉄道で一路北上し、洛陽に向かった。芥川龍之介の長沙訪問は、漢口滞在中の4日間を利用して行われた。

## II. 長沙市街の見聞

### 1. 1921年の湖南省

1920年代、湖南省の政治は連省自治運動、すなわち各省の自治、湖南省の民主化、連邦制国家の建設を中心に展開した。これは、1920年6月に湖南省長兼督軍の張敬堯が湖南省から逃走し、湖南省長に譚延闊が、湖南軍総指揮に趙恒惕が就任したことから始まった。譚延闊は中華民国成立以降、これが3度目の湖南省の政権掌握となり、全国に打電し、「湖南人による湖南」の建設を宣言した。しかし、湖南省憲法の制定は、湖南省政府内の派閥抗争、各界の抵抗などで混迷を深めた。1920年12月、譚延闊は下野し、湘軍総司令趙恒惕が湖南省長に就任した。趙恒惕は湖南省の自治と各省の連合を目指し、1921年4月に湖南省憲法の草案を提出した。

1921年5月3日、女界聯合会が湖南省教育会で憲法審査員歓迎会を開いた。中華民国は、臨時約法でも女性の参政権が明記されず、男女同権も未達成であった。このため、女界聯合会は湖南省憲法の草案に女性の権利の明記を訴えた。省立第一

女子師範学校の黎群鐸が最初に演説をし、中国では共和政成立以降も、男女同権が認められていないとして、1、男子の買春や妾をもうけることの禁止、2、男女平等の遺産の継承権、3、男女平等の選挙権、被選挙権、4、女子の兵役の義務の解消、以上の4点をあげ、特に女性の教育権の確立のため、経済的な補償、更に女性の遺産の継承権を強調した。次に建本女子校長・周天樸がこれに婚姻の自由、職業の平等、一夫一婦なども加えるべきだと述べると、女界聯合会代表の魏正立が黎群鐸と周天樸の意見をまとめる形で、要求を集約した。この結果、女界聯合会は5月15日に会議を開き、翌5月16日の湖南省憲法審査会に赴き、要求の貫徹を図ることにした<sup>10</sup>。

1921年5月7日、長沙では、湖南学生聯合会を中心となって、国恥記念日の式典を挙行した。これより先、1915年、日本政府は袁世凱政権に対して二一ヵ条を要求し、5月7日に返答の最後通牒を出し、5月9日に袁世凱政権はこれを受諾した。このため、5月7日が中国の国恥記念日、国家の屈辱を記憶に留める日となった。1919年5月4日、北京の学生が第一次世界大戦の講和会議の結果に抗議して、日本の二一ヵ条の取り消し、青島返還などの要求を掲げて示威運動を起こした。湖南省でも、5月7日の国恥記念日に示威運動が行われ、6月3日に湖南省学生聯合会が正式に成立し、長沙の各学校の一斉ストライキが実施された。1921年5月7日、湖南省学生聯合会所属の61校の学生が午前9時に教育会に集合し、9時半に国恥記念日の儀式を挙行した。総務主任の潘世模が最初に、開会の理由を説明し、今回の運動には1、国恥の記念、2、省憲の擁護、以上2つの目的があり、湖南省憲法の草案が提出された時機でもあるため、ここにおいて「民治の精神」を發揮すべきであるとした。

各学校の学生は国恥記念日の式典終了後、「国恥を忘れるな」「省憲を擁護せよ」「國貨を維持せ

よ」と記された小旗を掲げて長沙市街を行進し、各所で演説を行った。同行進では、秩序を維持し、国恥を記憶に留め、憲法を擁護し、良心的な主張を説き、和平的な運動を行うことで、多くの民衆の同情を引き出し、万全の結果を得るように心掛け、長沙師範大学学生の作成した伝單（ビラ）を配布して回った。この伝單には、「皆さん、今日がいかなる日か知っていますか。民国4（1915）年、倭奴（日本）が二ヵ条の要求をなし、我が政府に承認を迫った、正にその日です」と記され、中国の屈辱を忘れずにいることと、全国民の精神の奮起、人々の「救国思想」の喚起の重要性を説き、日本製品の不買運動の推進についても明記された<sup>⑪</sup>。

5月27日、すなわち芥川龍之介が長沙に到着する前々日、長沙駐在領事代理池永林一は外務大臣内田康哉にあてて、湖南省の排日運動の激化を報じ、かつ「排日団」が常德、衡州、湘潭、寧鄉、郴州などの地で、同地が未開港地であることを理由に、日本人商店に対して即座に立ち退くよう度々要求しており、このため日本人商店を中国人の名義に変更することに許可を求めた。この2ヵ月前、大韓民国臨時政府特派員の李若松、李今春、黃松友の3名が湖南省に至り、通俗報館で「排日演説」を行うと共に、3月16日、17日、18日付け『民治日報』にこの演説の内容を「大韓志士來湘之演説」と題して掲載した。池永林一は、3月18日に湖南省政府交渉委員の仇鰲に対して、この演説の新聞掲載差し止め、排日宣伝の取締りを要請していた<sup>⑫</sup>。『大公報』（長沙）は、度重ねて朝鮮の独立運動を報じていた。池永林一は、上海、長沙、ソウルの排日運動を連携した動きと受け取っていたのである。

## 2. 芥川の長沙訪問

1921年5月29日、芥川龍之介は漢口を出ると、船中から洞庭湖の「濁水」を眺め、「もう沢国に

もあきあきした」と述べながら、長沙に到着した（「書簡」972）。芥川龍之介は小説「湖南の扇」の中で、主人公の長沙での宿泊地を「日本人俱楽部」としている。同所は芥川が実際に宿泊した場所であったと思われる。この「日本人俱楽部」とは日本海軍俱楽部のことであろう<sup>⑬</sup>。日本の海軍は、日本の権益を守るという名目で、軍艦の隅田と伏見を長江に周航させた。隅田と伏見は洞庭湖を越えて湘江にも入り、長沙などに停留した。このため、長沙には、海軍の士官用の宿泊施設が必要となつた。これが日本海軍俱楽部である。日本海軍俱楽部は、湘江の中の砂洲、水陸洲にあった。水陸洲は東に長沙市街、西に岳麓山を望み、風光明媚なだけでなく、周囲が水で囲まれ、喧騒も聞こえず、絶好の住地であった。イギリスが1911年に領事館を同地に建設後、ドイツ、アメリカ、日本が洋館を建設した。同地には、日本領事館の他、日本海軍俱楽部、日本照相（写真）館、日本の巡査住宅などがあった<sup>⑭</sup>。

芥川龍之介の長沙滞在は、5月29日から6月1日までの3泊4日である。芥川は小説「湖南の扇」で、主人公の長沙滞在期間を5月16日から19日までとし、かつ第2日に「或女学校」に出掛け、第3日に岳麓山を周遊し、第4日夕刻に沅江丸に乗船し、長沙を離れたとしている。ただし、芥川龍之介は手帳の中で、岳麓山の周遊、葉徳輝の住居の訪問、女学校の参観の順に記載し、更に5月31日、石田幹之助にあてた書簡で「僕明朝漢口に帰り」と記している（「書簡」975）。このメモの順番や書簡の内容に従えば、芥川龍之介の長沙での足取りは、小説「湖南の扇」の順番と異なる。小説「湖南の扇」は、芥川の長沙での体験を下にしながら、多くの脚色が加えられて成り立っている。ここでは未確定ながらも、1つの仮説として、第1日（5月29日）に長沙到着、第2日（5月30日）に岳麓山の周遊、第3日（5月31日）午前に葉徳輝の住居訪問、同日午後に女学校の参観、第4日

(6月1日)の朝に長沙からの出立、と考えてみることにしたい<sup>15</sup>。

5月30日早朝、芥川龍之介は友人の案内で、モーターボートに乗り、水陸洲から岳麓山に向かった。岳麓山の麓には、湖南公立工業専門学校があつた。同校の前身は嶽麓書院と求実書院の併合による湖南高等学堂である。湖南高等学堂は1912年に湖南高等師範学校、1916年に湖南公立工業専門学校と改名し、1926年に幾つかの学校と合併して湖南大学となつた<sup>16</sup>。芥川龍之介は友人に勧められて、同校を参観した。同校の教室では電気工学が講義されており、アメリカ人の教師が二人いた。芥川はこの他に、閲覧室、実習室、庭園、化学薬品室などを参観した。芥川は同校の参観を終えると、岳麓山に登つた。岳麓山は公園になり、頂近くに黄興の墓、この一段下に蔡鍔の墓があつて、この墓参用に国費で大きな道路が作られていた。芥川は岳麓山に登ると、麓山寺、愛晚亭、二南詩刻（張南軒と錢南園の詩の石刻）、岳麓寺（萬寿寺と改名）、雲麓宮、望湘亭などを見学し、同日の観光を終えた（「手帳」6）。

翌5月31日午前、芥川龍之介は日本海軍俱楽部を出ると、水陸洲から湘江を渡つて長沙市街に入り、葉徳輝の家を訪れた。葉徳輝は1892年の進士で、吏部主事となつたが、官界の窮屈さを嫌い、長沙に隠棲し、莫大な財産を背景に学問に打ち込み、王先謙、王闔運と共に湖南省の「二王一葉」と称された。葉徳輝は藏書家としても著名で、『觀古堂彙刻』『觀古堂著書』『雙梅景叢書』などを刊行した。葉徳輝の寓居は、小西門から東の坡子街、更に黄興路を渡つた、蘇家巷の怡園にあつた。葉徳輝には塩谷温、松崎鶴雄、白岩龍平、水野梅曉、永井禾原（久一郎）など、日本人の門人、知人がいた。葉徳輝は1915年に湖南教育会会长、籌安会湖南分会長となるが、1916年に袁世凱の帝制の挫折に伴つて上海、蘇州に難を避け、1919年10月に長沙に戻り、1920年5月には諸橋轍次の訪問を受

け、共に学問を語り合つてゐた<sup>17</sup>。そして、葉徳輝は1920年に蘇州に戻ると、1921年から北京に滞在して、1922年に長沙に戻つてゐた。しかし、芥川が訪れた時には、葉徳輝は蘇州に出掛けつていて不在であり、長男の葉啓倬（字は明甫、号は尚農）が葉徳輝に代わつて応対をした（「書簡」975、「手帳」6）。

5月31日午後、芥川龍之介は、葉徳輝の寓居のある蘇家巷に程近い、省立第一女子師範学校を参観した。同校は1909年創設の稻田女子師範学堂に始まり、長沙市街の東南、天心閣近郊の古稻田に位置し、1912年に省立第一女子師範学校、1929年に省立第二中学校、1934年に省立長沙女子中学と改名した。中学は高級（普通科・師範科）と初級に分かれ、小学校、幼稚園を付設した。同校は、朱劍凡が1912年に校長となり、五四運動では中心的な役割を果したが、1938年の長沙の大火で焼失し廃校となつた<sup>18</sup>。芥川の参観では、「古今に稀なる仏頂面をした年少の教師」が案内をしてくれた。学生たちは排日運動のために、日本製の鉛筆を用ひず、机の上に筆や硯を置いて勉強をしていた（「雜信一束」）。芥川が校舎の二階に上り裁縫室、図書室を見て回り、次いで高等小学校を参観すると、小学生が「我校的運動会」「不要忘了今日（今日を忘れるな）」という題で作文をしていた。そして、芥川が通訳の少年を介して寄宿舎の参観も申し出ると、「rapeがあるといけませんから」と言われ、却下された（「手帳」6）。

### 3. 長沙の排日運動

1921年5月26日、すなわち芥川龍之介の長沙訪問の3日前、熊希齡と妻の朱其慧が長沙に到着した。

ここで、2人の経歴を簡単に記しておこう。

熊希齡（字は秉三）は湖南省鳳凰庁の人（原籍は江西省）、1894年の進士で翰林院庶吉士に任せられ、日清戦争の敗北に衝撃を受け、中国の改革

を志すも、1898年の戊戌政変に連座して郷里に隠棲し、1902年より湖南省の教育振興に従事したのを手始めに、各省の実業振興、財政改革に辣腕を揮った。中華民国の成立後、1912年の唐紹儀内閣、陸徵祥内閣で財政総長となるが程なく辞任し、1913年に袁世凱の要請で内閣を組織し、各界から指弾を浴びて辞任した。熊希齡は1919年頃以降、政界と距離を置き慈善福祉活動に専念、1920年には北京郊外に香山慈幼院を設立し、孤児の生活や教育を支援した。一方、妻の朱其慧（字は淑雅）は江蘇省宝山の人、熊希齡と結婚して熊朱其慧となり、香山慈幼院の仕事を助け、婦女紅十字会を設立し、1923年に陶行知と中華教育促進会を設立し、平民教育を提唱した。

5月、湖南省は未曾有の飢饉に見舞われ、極端な食糧不足に陥っており、飢民が新化、安化、醴陵などから大挙して長沙に押し寄せていた。また、湖南省憲法の草案が出され、女界聯合会が女性の参政権などを明記すべく、活動を開始していた。更に、湖南省では社会改革が提唱され、社会改革の基本に教育が位置付けられていた。このため、湖南省の各界は、熊希齡と朱其慧が慈善事業家、教育改革者として著名であったことから、2人の長沙訪問を歓迎し、湖南省憲法研究会が5月29日に、湖南省教育会と長沙総商会が5月30日に、女界聯合会が5月31日に、湘西協会、福湘女子中学校、芸芳女子中学校が6月1日に各々、2人の講演会を開催した<sup>19</sup>。熊希齡と朱其慧は各所で教育の振興、社会の改善だけでなく、女性の権利の拡張、地位の向上を説いた。この言動は連日、『大公報』（長沙）の一面で大きく報じられた。

しかし、芥川龍之介のメモにはこれに関する記載はない。芥川はこれらの出来事を知らなかったのであろうか。芥川は様々なイベントに気を留めながら、むしろ長沙の学校など、多くの名所を見学する反面、長沙市街の路地裏や歓楽街を歩き回り、日常の営みに目を注いでいた。

この芥川龍之介の関心の所在を象徴するのが、芥川の「日清汽船の傍、中日銀行の敷地及税關と日清汽船との間に死刑を行ふ。刀にて首を斬る。支那人饅頭を血にひたし食ふ——佐野氏」（「手帳」6）というメモの記述である。この死刑の行われた場所は、湘江河岸、小西門外の辺りを指す。芥川龍之介の長沙到着の約1ヵ月前、1921年4月5日（旧暦2月27日）は清明節、すなわち祖先を祀り墓参りを行う日であった。湘潭警察庁長の周君道は護衛兵を連れて祖先の墓参りに出掛け、湘潭に戻る途中、9人の「土匪」に襲撃、殺害された。これらの「土匪」は軍服を着て機関銃を持っていたが、後に出動した軍隊などに捕縛、処刑された<sup>20</sup>。この襲撃事件は、湘潭の警察庁長を殺害した点で、根深い怨恨と周到な計画性を備えていた。芥川は長沙滞在中、この事件の逸話を聞き、黄六一（黄老爺）、樊阿七の話として小説「湖南の扇」の中に挿入したように思われる。

芥川龍之介は小説「湖南の扇」の中で、長沙の妓館について述べ、「僕らの通った二階の部屋は中央に据えたテエブルは勿論、椅子も、唾壺も、衣裳簞笥も、上海や漢口の妓館にあるのと殆ど変りは見えなかつた」と記している。芥川は上海でも、余潤に連れられて、妓館を訪れている。そして、小説「湖南の扇」では、玉蘭、林大嬌、含芳の妓女を登場させている。長沙市街の繁華街は、湘江河岸の小西門から東に入り、太平街、坡子街、碧湘街の一帯に拡がる。この坡子街の南には、樊西巷、百花村、仁美園などの歓楽街が位置した。樊西巷を東に向い、黄興路を渡ると、葉德輝の居住した蘇家巷の怡園がある。蘇家巷の南には、京劇や湘劇の劇団のある織機巷が、更に妓館のある小瀛州が存在した。これら妓館の高級なものは堂班と呼ばれ、清香堂、愛福堂、清蓮堂などが著名であった<sup>21</sup>。芥川龍之介が長沙滞在中、妓館を訪れたとすれば5月31日、葉德輝の寓居と省立第一女子師範学校を訪問した後である。芥川龍之介は

妓女だけでなく、社会の没落者、ならず者にも眼を向け続けた。

### III. 排日運動の底流

#### 1. 湖南省と広東省

芥川龍之介は小説「湖南の扇」において、「廣東に生れた孫逸仙らを除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黃興、蔡鍔、宋教仁らはいずれも湖南に生れている」と記し、この理由として「曾国藩や張之洞の感化」と共に、「湖南の民自身の負けぬ気の強いこと」を指摘している。芥川龍之介の関心は同時代の中国にはないかに見えて、寧ろ逆である。芥川龍之介は、古典などの古い題材を借りて、これに新しい内容を盛り込み、小説を仕立てあげるの得意としたように、清末の湖南省の革命運動に題材を取りつつ、1921年の中国人の排日運動に潜む復仇の念に言及し、日本の中国侵略に警鐘を鳴らしているのである。ただし、この考えは、1921年に中国旅行をした段階では、左程強くはなかった。しかし、1921年から1924年にかけて、日本の中国侵略は強まり、中国の排日運動も激しさを増した。芥川龍之介はこの情勢を見据えて、あえて「湖南の扇」を著し、日本の読者に警鐘を与えようとしたのである。芥川龍之介は湖南省と広東省を対比し、湖南省の政治家の代表として黃興、蔡鍔、宋教仁を挙げている。このような芥川の湖南省に対する観点は、何に由来するのであろうか。

芥川龍之介は度々、『中央公論』に小説を掲載しているが、この『中央公論』第26年第11号（1911年11月発行）では、10月10日の武昌蜂起の報を受けて、特集「孫逸仙外（ほか）、革命党首領人物評」が組まれていた。同特集は、三宅雪嶺、覆面道人、根津一、断水樓主人、小川平吉、上野岩太郎、福田和五郎、大隈重信、清藤幸七郎、内田良平、水野梅暁、宮崎滔天の12名の論説を掲載している。この中でも、清藤幸八郎は「孫と黄と宋と」で「宋

（教仁）と黄（興）の殊によいと思ふのは、彼等は自ら其功に居らぬといふ点である」と述べて、孫文が権力志向的であるのに比べて、黄興、宋教仁が無欲であるとし、更に内田良平は「孫逸仙と黄興とを評す」で孫文と黄興を比較し、孫文を「陰謀家」「学問も該博、智識も広汎〔な人〕」、黄興を「勇気の勝れた人」「実際運動の首領たるに適した人」と位置付けて、湖南省出身者の傑出した特徴を論じた。芥川龍之介はこれらの論説に影響されて、湖南省の政治家の「負けぬ気の強さ」、すなわち気骨、精神に關心を抱いていたといえよう。

芥川龍之介は小説「湖南の扇」を執筆するにあたり、手帳に「水陸洲。税関官舎。伝（傳）家洲。英國領事館。湖南。廣東。黃興。宋教仁。支那亡國紀念会。秦力山。湖廣總督。張之洞。武昌の兩湖書院」「戊戌の変。譚嗣同。詩的。畢永年。僧になる。哥老会。湘潭」「曾国藩。瞿鴻機（禪）。紅牌樓。小西門外。〈日本人〉赭石砂岩層」（『手帳』9）などのメモを記している。これらのメモの幾つかは、平山周の「支那革命党及秘密結社」（『日本及日本人』第569号、1911年11月）に由来している。特に、平山の論説には、中国の秘密結社の來歴、事跡と共に、畢永年が1899年に譚嗣同の遺志を継ぎ、孫文と興漢会を結成しながら、興漢会の仲間に失望して僧侶になったこと、章炳麟、秦力山が1902年に「支那亡國二百四十二年紀念会」を計画し、日本駐在公使蔡鈞の妨害で挫折したこと等が記され、芥川龍之介のメモの内容とも符合する。支那亡國紀念会は、明の滅亡や崇禎帝の自殺を心に刻み、満洲王朝への報復を誓ったものである。中華民国の国恥記念日は、畢永年が譚嗣同の復仇を、章炳麟、秦力山が明の復仇を果たそうとした点と、対象こそ異なるが、志としては同一線上にある。

芥川龍之介は小説「湖南の扇」で、「×××と言ふ長沙の役者」の存在を仄めかし、「僕は生憎

その名前だけはノオトにとる訣に行かなかった」と記しており、長沙では観劇もしていたようである。長沙の戯劇には、京劇、湘劇、平劇、話劇（俗称が文明戯）の4種類がある。長沙に話劇、すなわち文明戯をもたらしたのは、欧陽予倩である。欧陽予倩は1889年、欧陽中鵠を祖父に、瀏陽に生まれ、日本に渡り、明治大学、早稲田大学に学び、1907年に春柳社に加わり、辛亥革命後に帰国し、1913年に長沙に文社を設立後、湯郷銘の迫害を逃れて、上海や南通で演劇活動を行った<sup>22</sup>。欧陽予倩の祖父は、譚嗣同や唐才常の師の欧陽中鵠である。ただし、長沙では、話劇は人気がなく、劇団も運営に苦慮した。これに対して、圧倒的な人気を博したのは湘劇であり、周文湘、羅裕庭、陳紹益といった名優を輩出した。彼らは、葉徳輝の運営した同春班に属し、「袁世凱逼帝（袁世凱、皇帝に退位を迫る）」や「刺恩銘（恩銘を暗殺する）」などの新作も創った。前者は1912年の溥儀の退位を、後者は1907年の徐錫麟の安徽巡撫恩銘の暗殺計画を題材に取っている。徐錫麟の暗殺事件では、秋瑾も連座して刑死している<sup>23</sup>。民衆の抑圧者への抵抗、復仇の念は、これら戯劇を通じて世々伝えられた。

## 2. 復仇伝説の継承

芥川龍之介は小説「湖南の扇」を、1926年1月に発表した。芥川の中国周遊と小説「湖南の扇」の発表の間には、4年半の時間が存在する。この間、日本の中国侵略は激しさを増し、中国では排日運動が高まった。芥川が1921年3月30日に上海に到着した時には、溥儀の復辟の謡言が起きていた。溥儀の復辟は、1917年に張勲によって起こされ、僅か12日で失敗した。この謡言が1920年代に再び起きた背景には、北京政府の混迷、社会不安の醸成がある。日本の軍部は、この政治不安、社会不穏を巧みに利用して、中国で親日政権の樹立を画策した。しかし、このことが、中国国内の排

日運動を刺激した。芥川龍之介は中国旅行の行く先々で、中国の激しい排日運動に直面した。中国の排日運動は、伝單（ビラ）や壁の落書きに記された、復仇の念によって鼓舞された。芥川龍之介が小説「湖南の扇」を執筆した動機の1つは、日本の中国侵略の激化、日本人の横暴、傲慢さに警鐘を鳴らすと共に、中国の排日運動の底流に流れる復仇の念を、何らかの形で表そうとした点にあるように思われる。

このことを端的に表わすのが、芥川龍之介が1924年3月から9月まで、『女性改造』に連載した「僻見」である。芥川はこの中で、「[この言葉が]未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる」と記して、章炳麟が1921年4月の会談で「予の最も嫌惡する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない」と述べたことを紹介している。芥川龍之介は1924年7月1日、この章炳麟の言葉に刺激されて、小説「桃太郎」を『サンデー毎日』夏期特別号に発表した<sup>24</sup>。桃太郎伝説は、章炳麟にとっては、日本の侵略的、好戦的な性格を示す象徴であった。しかし、芥川は、1921年の「上海游記」では、章炳麟にこのような言葉のあったことなど、記していないかった。ところが、1924年になって始めて明らかにしたのである。芥川龍之介の心中には、1921年から1924年までに、大きな変化の生じていたことを意味する。この心中の変化を促したのが、日本の中国侵略の激化であろう。

芥川龍之介が1921年3月からの中国旅行に備えて読もうとした書物の一つに、宇野哲人『支那文明記』（大同館、1912年）がある<sup>25</sup>。宇野哲人は同書の中で、1907年に長沙を訪れて目撃した落書き、すなわち「大地旗旗雍々、同胞不必震驚、今也天心有授、體天伐罪弔（吊）民、特為祖先雪恥、願期同徳同心、恢復江山帰漢、共保黃帝子孫（大地に揚々と旗が棚引けるが、同胞よ、決して驚くでない。今また天意が授けられた。天意を体し、

罪人を討ち、万民を安んじよう。特に、祖宗のために恥を雪ごうとすれば、徳を同じくし、心を共にすべきである。江山一統して漢に帰し、黄帝の子孫を保たん)」を紹介している。そして、宇野哲人はこの落書きが1906年の萍瀏醴蜂起の檄文であると断じた上で、「其立言何ぞ夫れ堂々たる。兵数約三万、其の内三千は殺され、一敗地に塗れて遂に雲散夢消したが、此の思想は湖南健児の中に鬱勃として磨滅すべからざるものがあつて、遂に今回の革命騒乱(1911年の武昌蜂起)となった」と述べて、辛亥革命がこの檄文の復仇の念によつて惹起されたとした。

芥川龍之介は5月8日から、蘇州、鎮江、揚州、南京の旅に出て、揚州の天平山白雲寺において、排日の落書きを目にして記録に留めた。この落書きは、「諸君爾在快活之時、不可忘了三七二十二条(諸君、君たちが楽しい時も日本の二一ヵ条を忘れてはならない)、「犬与日奴不得題壁(犬と日本人はこの壁に詩文を書き記してはならない)、「莽蕩河山起暮愁。何來不共戴天仇。恨無十万橫磨劍。殺盡倭奴方罷休(怒濤さかまく山河に夕暮れの憂いが生ずる。何より来たるや分斷された恨みは。惜しむべきは十万の横磨剣がないことだ。日本人を殺し尽くして始めて手を休めよう)」というものである(「江南游記」)。この文句は、劉伯温(基)の作とされる預言書『焼餅歌』の一節、「手に綱(鋼)刀を執ること九十九、胡人を殺し尽くして方(はじ)めて手を罷めん」をなぞったものである<sup>26</sup>。預言書『焼餅歌』の一節は、「殺家韃子」伝説、すなわち中秋節の蜂起伝説と結び付き、戯劇の台詞の中に挿入されて、民衆の排満感情を鼓舞した。中華民国では、これが排日運動に転じた。芥川は揚州で排日の落書きを目にした時、宇野哲人の文章を想起したのではなかろうか。そして、芥川は中国の排日運動の底に流れる復仇の念に思いを馳せ、これを「江南游記」に記したように思われる。

1925年以降、湖南省では農民運動が興隆し、農民協会が組織されて、武装闘争を繰り広げた。そして、芥川龍之介が長沙滞在中、会おうとした葉徳輝も、1927年4月に湖南農工界の大会で処刑された。芥川龍之介は長沙を旅して、個々の出来事の深層にうごめく動向を感じ取っていたともいえよう。芥川は「雜信一束」で、長沙を「往来に死刑の行われる町、チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞える町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいきれる町、鶏さえ僕を脅すように『アクラガワサアン!』と闘をつくる町……」と評している。水の音は湘江の流れの音であろう。芥川龍之介はひとえに川を愛し、川の匂い、川の色、川の音に言い知れぬ郷愁と寂寞を感じ、時として涙ぐんだ。芥川は文壇にデビューする前の1914年、「大川の水」を雑誌『心の花』第18巻第4号に発表すると、「(大川が)何処となく、生きて動いていると云う気がする。しかもその動いてゆく先は、無始無終に亘る『永遠』の不可思議だと云う気がする」と記している。川は、水面が静かに波うつっていても、底流では重厚で激しい流れを刻む。芥川は湘江の流れを見つめ、自身にも長沙にも、また日本にも到来するであろう激変の予兆に慄きながら、永遠の時間に思いを馳せていたのではないかろうか。

### おわりに

1919年の五四運動は、中国の知識人、学生を刺激し、各地で雑誌の発刊が相次ぎ、湖南省でも『湘江評論』が創刊された。毛沢東は『湘江評論』創刊宣言や「民衆の大連合」を掲載し、各地の思潮を鼓舞した。1920年6月、張敬堯が湖南省から追放され、湖南人が湖南省を治める「自決自治」が提唱された。毛沢東は7月に長沙に戻ると、8月に文化書社を設立し、更に9月に湖南第一師範学校の付属小学校の校長に就任し、年末には楊開慧と結婚をした。これに前後して、『大公報』(長

沙) では湖南自治、湖南独立、湖南憲法の制定などの言論が華々しく掲載され、湖南省の連省自治運動が鼓舞された。1921年5月、芥川龍之介が長沙を訪問した時は、新文化運動、五四運動をへて、この新しい思潮が芽生え、開花し、発展した時期にあたる。芥川は新しい思潮に言及することはなかったが、知らなかつたわけではない。芥川は5月31日、滝井孝作にあてて「此處(長沙)の名物は新思想とチブスだ」と述べたように(「書簡」976)、新しい思潮を感染症と同列に置き、違和感を表していた。

この4年半後、すなわち1926年1月、芥川龍之介は小説「湖南の扇」を発表し、中国の排日運動の底に流れる復仇の念を伝えた。この復仇の念は、玉蘭による血の沁み込んだビスケットを食べる場面に象徴される。このビスケットを食べる場面は、中国に残存する根深い迷信と共に、人々の復仇を受け継ぐ魂、生命の継承を意味しているともいえよう。芥川龍之介は1921年4月に李人傑と上海で会談して以来、ずっと李人傑の主張が脳裡をよぎっていたように思われる。李人傑は芥川との会談で、政治革命の前には社会革命が必要となり、社会革命のためには人心を変える必要があるとして、人心の改革の役割を文学に求めた。芥川龍之介は小説「湖南の扇」の中で、玉蘭が血の沁み込んだビスケットを食べる場面を描写しつつ、知識人の譚永年に「こんな迷信こそ国辱だね」と言わせ、この行為を迷信として切り捨てた。ここには、芥川龍之介の迷いが存在するようである。そして、芥川は傍観者のような冷やかな態度で、主人公に「彼(譚永年)の玉蘭を苦しめた理由ははつきりとは僕にもわからなかつた」と言わせると、滞在費を計算させて、唐突にこの小説を終えるのである。

1920年代、中国は北京、広州、長江流域で各々、新しい政府の樹立が模索され、政治的には四分五裂の状況にあった。しかし、社会や文化に目を転

じてみると、苦しみながらも、活き活きとして、多くの可能性に充ちた時代であった。湖南省の知識人、学生、民衆の言動は、このような可能性の一端を示していた。芥川龍之介は1921年3月から4月にかけて、この湖南省の省都・長沙を僅か4日間であるが旅行して、これらの息吹に触れた。この息吹は、排日運動の激化など、芥川には苦い思い出でもあったが、同時に新鮮な感覚を呼び醒ますものであった。何となれば、湖南省の排日運動に含まれる復仇の念は、中国の民衆の精神、生命の根源を想起させたからである。芥川龍之介は長沙旅行から4年半後の1926年1月、「湖南の扇」を発表し、この復仇の念を何らかの形で表そうとした。ところが、この小説に漂っているのは、新しい息吹どころか、著しい倦怠感と空虚さ、冷やかさである。これは、芥川龍之介が1922年に「支那游記」を上梓した時にはなかった。このことは、読者をして、不安な面持ちにさせる。芥川龍之介がこの2年後、自殺したことを知っているからである。

### [注]

本論文では、史料を引用する場合、漢字を一部常用漢字に改めると共に、適宜句読点を補った。引用文中の〈　〉は原注、(　)は引用者による説明の注、〔　〕は引用者による補足の注である。なお、中国の政治家、知識人の字、号、略歴は、陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』(浙江古籍出版社、2005年)の記述によった。

(1)塙谷周次「『湖南の扇』論考——芥川龍之介晩年の位相」(『日本文学』第21号、1972年)、青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説(承前)」(『関東学園大学紀要 経済学部編』第16集、1989年)、溝部優実子「『湖南の扇』——含芳の『扇』を糸口として」(『日本女子大学紀要 文学部』第

- 48号, 1998年), 劉耕毓「『湖南の扇』論——中国革命との関連をめぐって」(『九大日文』第15号, 2010年)。
- (2)戸田民子「芥川龍之介『上海游記』——里見病院のことなど」(『論究日本文学』第46号, 1983年), 青柳達雄「李人傑——芥川龍之介『支那游記』中の人物」(『国文学 言語と文学』第103号, 1988年), 関口安義『特派員 芥川龍之介——中国でなにを観たのか』(毎日新聞社, 1997年), 工藤貴正「李漢俊と表現主義——ロシア未来派との関係及び翻訳主義を巡って」上・下(『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学篇)』第45号, 第46号, 2013年, 2014年)。
- (3)拙著『湖南省近代政治史研究』(汲古書院, 2013年)。
- (4)本論文では、『芥川龍之介全集』全24巻(岩波書店, 1996-1998年)を用いた。書簡は『芥川龍之介全集 第19巻』所収の「大正十(1921)年」, メモは『芥川龍之介全集 第23巻』所収の「手帳6」及び「手帳8」による。そして、本文中で典拠を示す場合、『支那游記』は「上海游記」「江南游記」「長江游記」「雜信一束」に分け、書簡は番号, メモは「手帳」6, などと記した。
- (5)宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第1巻(平凡社, 1971年) 561-589頁。
- (6)中国歴史博物館編・勞祖德整理『鄭孝胥日記』第4冊(中華書局, 1993年) 1862-1863頁, 『申報』1921年3月28日「否認復辟謠」, 『大公報』(長沙) 1921年3月31日「復辟即将実現説」, 『大公報』(天津) 1921年4月1日「西報之復辟觀」。
- (7)大里浩秋編「宗方小太郎日記, 大正9-10年」(神奈川大学人文研究所『人文学研究年報』第58号, 2017年) 108-109頁。
- (8)宗方小太郎と井手三郎については東亞同文会編『対支回顧録』下巻(東亞同文会, 1936年, 原書房, 1968年復刊), 西本省三, 島田数雄については黒龍会編『東亞先覚志士記伝』(黒龍会, 1936年, 原書房, 1966年復刻), 村田孜郎, 太田外世雄, 林出賢次郎については大学編纂委員会編『東亞同文書院大学史——創立八十周年記念誌』(滙友会, 1982年), 以上を参照されたい。
- (9)『都新聞』1921年4月7日「東亞新聞大会」。
- (10)『大公報』(天津) 1921年5月11日「湘女界力争女權」, 同5月25日「湘女界運動女權之激進」。
- (11)『大公報』(長沙) 1921年5月7日「本日之国恥紀念」, 同5月8日「国恥紀念遊街記」。
- (12)外務省外交史料館所蔵『外務省警察史 第50卷 5 支那ノ部(中支)』(不二出版, 2001年) 79-82頁。
- (13)鄒欠白『増訂再版 長沙市指南』(和済印刷公司, 1935年) 40頁。
- (14)黃綱正・周英・周翰陶『湘城滄桑之變』(湖南文芸出版社, 1997年) 167頁。
- (15)芥川龍之介は小説「湖南の扇」で、主人公が汽船の沅江丸で5月16日の午後4頃に長沙に到着し, 5月19日の午後5時頃に同じく沅江丸に乗り, 長沙を出立したとしており, 芥川の実際の行程とは, 大きく異なる。
- (16)湖南省志編纂委員会編『湖南省志第1巻 湖南近百年大事紀述 第2次修訂本』(湖南人民出版社, 1979年) 529頁。
- (17)松崎鶴雄『柔父隨筆』(座右宝刊行会, 1943年) 109-123頁, 王逸明主編『葉德輝集』第4冊(学苑出版社, 2007年) 433-434頁。
- (18)陳先枢・金豫北編著『長沙地名古迹攬勝』(中國文聯出版社, 2002年) 38頁, 黃曾甫「長沙女子教育史話」(『長沙文史資料』第8号, 1989年), 『大公報』(長沙) 1921年3月18日「中等以上学校調査表」, 5月12日, 同校では運動会が催され, 一人の短髪の女子学生が登場して, 人々の耳目を集めた。『大公報』(長沙) 1921年5月13日「第一女師範運動会記」。
- (19)『大公報』(長沙) 1921年5月27日「熊鳳凰昨日抵省」, 同5月28日, 29日「審查会歡迎鳳凰記」,

- 同 5 月 30 日「省憲研究社歓迎熊鳳凰記」, 同 5  
月 31 日「教育会歓迎熊朱両先生記」, 同 6 月 1  
日「女界歓迎熊朱両先生紀事」, 同 6 月 1 日「昨  
日之歓迎熊朱両先生会」。
- (20)『大公報』(長沙) 1921年 4 月 7 日「湘潭警庁  
長遇害詳情」。
- (21)譚俊文「長沙娼妓之興廢」(『長沙文史資料』第  
8 号, 1989年)。
- (22)蘇閔鑫編『歐陽子倩研究資料』(中国戯劇出版社,  
1981年) 18頁。
- (23)黃曾甫「春泥館隨筆」(『長沙文史資料』増刊,  
1990年) 178 – 180, 186頁, 馬積高編『湖湘文  
史叢談』(湖南大学出版社, 2001年) 364 – 365頁。
- (24)関口安義『芥川龍之介』(岩波書店, 1995年)  
150頁。
- (25)芥川龍之介は小説「奇遇」(『中央公論』第36年  
4 月号) で, 小説家と編輯者を対話させ, この  
小説家が読む予定でいる中国の紀行, 地誌を  
15冊上げている。この中の 1 冊が, 宇野哲人『支  
那文明記』である。
- (26)石山福治撰『歴代巖禁秘密繪本 豫言集解説』  
(第一書房, 1935年) 174頁。